



## 岩谷禎久先生の御退任を惜しむ

佐藤 正 市\*

岩谷禎久先生は2022（令和4）年3月31日を以って本学を定年退職される。

先生は、1998（平成10）年に明星大学人文学部経済学科の助教授に、そして、2002（平成

14）年には人文学部経済学科から改組改変して設置された経済学部経済学科の教授に就任され、20年以上に亘って本学部の教育に尽力された。

---

\*明星大学 経済学部教授

先生は北海道でお生まれになり、1973（昭和49）年に法政大学経営学部経営学科に入学され、その後、自らが「理論経済学の師」と仰ぐ大家がおられる亜細亜大学大学院経済学研究科で理論経済学、とりわけ、公共経済学分野の研究に邁進され、以降、環境経済・公共政策の理論と政策に関わる研究分野の正に精鋭として多大な成果を収められた。

その膨大にして精緻な岩谷先生の研究業績の一端を紹介すると、主要な著書には『経済政策』{八千代出版、1994年（共著）}、『基礎環境学—循環型社会をめざして』{共立出版、2003年（共著）}が挙げられよう。また、筆者の独善に依ることをお許しただけだとすれば、膨大な論文から主要なものを紹介すると、「環境設備投資に関する最適環境制御問題」『日本経済政策学会年報』LX 73（1992年）、「最適環境制御における環境保全投資問題」『日本経済政策学会年報』XUI 56（1994年），“The Optimal Environmental Control of the Tradable Pollution Permits,” *THE BULLETIN OF ECONOMIC STUDIES* (30・31)、「排出権取引のための最適制御問題」『日本経済政策学会年報』XLIX（2002年）、・・・「環境対策費と市場占有率に関する動学的分析」(『明星大学経済学部研究紀要』Vol.49 No.1・2)等が挙げられよう。これらの主要な研究業績から見て取れる岩谷先生の主たる研究領域は、広くは最適環境制御問題にある。近年のご研究から当該問題領域に関する先生の研究成果の一端を見てみよう。2018年に執筆された「環境対策費と市場占有率に関する動学的分析」で得られた、市場占有率を争う2つの競争企業の行動を環境対策費水準を制御変数とする微分ゲームとして分析した結果（競争企業のOpen-Loop解）を同年に執筆された「環境対策費と市場占有率に関する戦略の動学的分析」(『明星大学経済学部研究紀要』

Vol.50 No.2)では競争企業のClosed-Loop戦略の一種であるFeedback戦略を用いた微分ゲームへと発展させ、ある一定の条件下（環境への配慮を考慮して商品を購入しようとする購買行動を変える消費者を想定し、環境対策費水準が競争企業の市場占有率にのみ影響を与えるもと仮定した場合）において、環境対策水準を制御変数として市場占有率を争う競争企業の行動が分析されている。当該研究領域は小生にとっては誠に門外漢ではあるが、岩谷先生のご研究は、地球環境問題としての環境制御に関わる公共政策の理論的フレームワークと政策課題の解明にも資する重要な論点を提起していると考えるのは小生の謬見、はたまた妄想でしょうか。いずれにせよ、最適環境制御問題に関する岩谷先生の研究成果は、当該研究領域の研究者のみならず、政策立案者にも高く評価されていることは門外漢である小生にも認知できることではあります。

以上、極めて粗雑且つ簡略に過ぎるとの誹りを恐れずに岩谷先生の略歴と研究業績について紹介したが、冒頭で述べたように、先生は20年以上に亘って本学に在職され、この間、2001（平成13）年の人文学部経済学科から経済学部経済学科への改組改変に際しては本学の「経済学部設置準備委員会」及び経済学部の「改組改変委員会」の中心メンバーとして経済学部の設置に尽力され、その後は経済学部長補佐等の要職を歴任されるなど、本学及び経済学部の発展に主導的な役割を果たされたことを敢えて述べさせて戴きたい。ご周知のように、（経済学部経済学科への改組改変に際しての）文科省への「設置認可申請」（書）の作成とその修正等の作業には膨大な時間と卓越した構想力が必要とされるが、岩谷先生は物の見事に短時間且つ適切に当該「申請書」を纏め上げたことを経済学部の「改組改変委員会」のメンバーの一人であった

私は昨日のように覚えている。

何時となく、事あるごとに先生とは小生の研究室で経済学部の運営に関わる問題やゼミ・卒業研究での教育・学生指導についてお話を伺う機会を得たことは私にとって望外の喜びでした。また、学部教授会における先生のご発言によって問題の解決が図られたことは幾度あったでしょう。先生のユーモアを交えた教育・学生指導には定評がありましたが、私にとって先生は大学教育の何たるかを教えていただいた恩師であり、1998（平成10）年に同期で就任した者として、先生の精力的且つ先進的な研究活動はもとより、豊かな発想力と実行力に裏打ちされた問題解決能力の凄みを有する教員は先生をおいて他にはいないと思うのは私一人だけでしょうか。おそらく多くの教職員も私と同様の思いを共有されているものと確信するに足るだけの根拠があります。

20数年以上の長きに亘る本学及び経済学部の教育・研究への多大なるご尽力とご貢献に心より感謝を申し上げますとともに、先生のますますのご発展とご健勝をお祈り申し上げます。お疲れ様でした。有難うございました。